

権 泰吉教授を送る

高橋 俊夫

本学経営学部教授、権 泰吉博士が2004年3月の年度末をもって退職することになった。満70才。定年規定にしたがっての退職であり、同じ学部に関わり続けてきた者の1人として、また個人的には同教授と同じ分野を専攻する者の1人としてさらには同氏と長く交誼を重ね接してきた一人として、さらには同じ師佐々木吉郎門下の後輩の一人としてここに送別の辞を送りたい。

権 泰吉教授は1955（昭和30）年本学経営学部に入學、それは1953（昭和28）年に私学最初の経営学部として創設されたまだほんの端緒の時期でもあった。権 泰吉教授の生れは今の韓国、大韓民国、韓国、慶尚南道の生れ、1934年2月11日したがって戦時下の少年時代にあっては日本語を習得する機会があっても、決して十分会得していたわけではない。本格的には日本にやってきてから習得した日本語であった。創設間もない頃の当時の1、2年次の教養課程は生田校舎であった。しかし、この時期から権 泰吉教授は学ぶことに努力を傾けていた。論理学、哲学、弁証法、唯物弁証法の基礎を当時担当していた篠崎 武教授の下で学んだ。ドイツ語についても佐藤 豊教授に学んだ。佐藤 豊教授は1938年から45年までベルリン大学に学び、一度は経営経済学を学ぶ目的で向かった留学先だった。しかし、同教授の話しによれば、すでに細分化していて、興味、関心がうすれ、経済史、歴史へ移っていったのだ、と。W.ゾンバルト、J.イエヒトに学んださらには、J.イエツセンと当時のベルリン大学で学び、かつ、日本語も教えていた貴重な体験をもつ先生であった。その教授の教えも権氏はうける。学生時代の4年間何よりも刺激になったのは経営経済学研究会。学生のこのサークルでの学習・研究会、交流だったのではないのか。1959（昭和34）年、新設された大学院経営学研究科、当時の修士課程に進む。学部、3、4年次のゼミナールは今村成男教授。経営学を担当されていたが、謹言実直な先生であった。矢内原忠雄門下、浦和高校時代にはラグーマン。人数の少ないわれわれが受けていた大学院時代の授業の折には時折ラグビー・ボールを追っていた学生時代の話

しに脱線することもあったが、一度たりとて大声をあげることのきいたことのない温厚なやさしい先生だった。この今村成男教授に権泰吉氏はかわいがられた。分け隔てなく接する先生であった。経営経済学研究会の先輩には木元進一郎、渡辺 睦という後に同僚となった教授がいた。この研究会の部長、顧問格は佐々木吉郎、醍醐作三教授。渡辺行男氏（後の駒沢大教授、故人）はこの時の友人。

創設されたばかりの大学院、経営学研究科に多くの学生がいたわけではない。商学研究科の院生、さらには政治経済学研究科の院生などとも共通の講義で一緒に学ぶことはよくあることだった。森川八州男（現、明治大、商学部教授）、松原成美（専修大学教授）、佐藤博明（静岡大学教授、前学長）などもともに席を同じくして机に向かった仲間ではないのか。前述の佐々木、醍醐、今村以外に、当時の大学院経営学研究科の教授は、土屋喬雄、山田坂仁、北 久一、山崎英雄、不破貞春、他研究科には平瀬乙之吉、麻生平八郎、佐々木道雄等々多くの論客が揃っていた。かつて駿河台のこの高台に大学院棟が建っていたのだ。聳えていたというべきであろうか。

地下1階が正面入口の八階建ての建物、2004年1月に完成をみたアカデミー・コモンの一角にあったのだ。1953年（昭和28年）に建てられた建物。その建物は昭和30年代の中頃でも丸の内のお堀り端から見ることでできる建物であった。だが、内実は教員の共同利用する研究室。3人、4人の共用でそれぞれの先生方の大きな机が入っていればまわりは本棚に囲まれてそれだけで“いっぱい”の部屋だった。院生はそこに間借りするかのようにして講義、指導をうけた。勿論クーラーもない研究室。だが、当時はそれが当り前のことであったのでは。

権 泰吉は大学院の5年間、佐々木吉郎の指導を受け、ここで経営学、経営管理論、アメリカ経営学を研究する。ひたすら没頭していたのではなかったのか、今でも時折フト思う、権さんから研究をとってしまったらいったい何が残るか、と。山にも誘ったことがある。何かと理屈をこねた。海、海には誘わなかった。温泉。一緒に出かけた楽しみは温泉ぐらいか。同僚と一緒に何度か温泉に出かけた。森 恒夫教授。少し前に退職された森 恒夫教授（現埼玉学園大学教授）は温泉好きの一人でもあった。こまめに計画を立ててわれわれを誘ってくれた。権泰吉氏をも含め森恒夫教授はいかに多大な影響を我々に残していったことか。経営学部の教員に対してだけではないと断言していいだろう。昭和30年代の末から40年、50年、60年とわが大学に多くの影響を与えていったのではないか。当時の大学には結束して向わなければならない難問がいつもあったのだ。すでに一つの時代は流れたというべきか。

権 泰吉は本学部にあつて講座・英米経営学を長く担当していた。経営組織論の講義は醍醐作三教授が停年になって退いてから担当するところとなった。単著としての本格的な研究は「経営組織論の展開」として1970年ミネルヴァ書房より刊行。本書は1965年学位論文として提

出された論文を骨子とした労作で、この論文によって日本の私立大学にあっての最初の経営学博士の学位取得、学位授与であった。本書はアメリカ経営学の流れを経営組織としての流れ、企業目的達成の手段として、共通の意思を形成する協業の体系、その企業レベルでの展開に着目し、そこで形成をみた理論の流れを伝統的組織論、人間関係論さらにはバーナード以降にみる近代組織論を取り上げた研究書であった。アメリカにおける資本主義の発展の中でマネジメントが管理組織がさらにはその行動科学的研究と結びつきの展開がいかになされてきたか、究明した一書であった。当時あっては類書の少ない新鮮な研究書であった。よく読まれた。

学部でのゼミナール、そして大学院での講義、演習、どれほど多くの学生が巣立っていったことか。工場見学に行くときにはよく権ゼミを誘って一緒に出かけた。毎年1度2度と出かけた。日産の座間工場、追浜工場、横浜の造船所、川崎製鉄の千葉工場、キャノンの取手工場、玉川工場、日清製粉の千葉工場、ライオン、サントリー、日本鋼管。今村先生が元気であった時誘われて日本鋼管の清水造船所を見学に行ったこともあった。森 恒夫、当時まだ元気だった熊谷一男、橋本和美教授も一緒だった。あれはまだわれわれが院生。権さんは助手、専任講師の頃だったのではないのか。

井藤正信、佐々木聡、高橋正泰、国島弘行、加藤志津子、青木克生、文 智彦、長井偉訓、磯山 優、円城寺敬浩等は権泰吉教授の下で直接指導をうけた。貴重な修業を積み重ねた大学院時代ではなかったのかと思う。

次に公開された単著は「アメリカ経営学の展開」。1984年。アメリカ経営学にみる管理論、組織論の展開に焦点をあて、その合理性を求めて広く対象を企業に限定することなく拡大して展開されてきた手法、技法を積極的に取り上げ、その究明は、バーナード・サイモン、さらにはコンティンジェンシー理論にまで及んでいた。それ以外にも論文は勿論多くの共著に加わって管理論、組織論を取り上げた。「現代経営組織論」日本評論社、1974年。広く経営学入門として、初学者向けに編まれた「経営学」1968年亜紀書房。中村瑞穂、丸山恵也、今野 登、坂口 康氏らと一緒に仕事をした本書はどれほど多くの版を重ねたことか。ここにあげた諸教授が同学の士として長く研究にあっての友人であったことにも変りない。さらに「経営学総論」1969年、中央経済社。「経営経済学本質論」1970年、中央経済社。「経営学史」1972年、亜紀書房。「戦後企業経営の変遷と展望」勁草書房、1982年。それ以外には辞典、翻訳にもかかわって執筆していた。

日本経営学会の会員として学会発表は勿論のこと理事をも務められて多く関与してきた。在任中を含めて本学での大会開催には4度はかかわっていたのではないのか。関東地区を中心にすでに40年余続いていた企業経済研究会の主要なメンバーの一人であったことは間違いない。どれだけ多くの研究のうえでの刺激をうけたことか。野口 祐、岩尾裕純、長谷川 広、木元

進一郎，高橋昭三，一寸木俊昭，鮎沢成男，村田 稔，鈴木幸毅，貫 隆夫；植竹晃久，勿論，前にあげた亜紀書房「経営学」の執筆メンバーと同様に多くの友情をかわした先輩，知人でもあったのではないのだろうか。同じように年を重ねたこと，これも事実。だが，それが人の世ではないのか。否，堂々と何んら臆することなく年をとってほしい，経験を重ねてきたことを誇りに思っよいのではなか。大病することもなく，いや風邪で寝込んだということさえあったのかとさえ思う。健康に留意されていることであろう，それは勿論である。だが，研究室にあっていつも何度となく奥さんに電話をかけて連絡をとるあの睦まじさゆえのことではなかったのか。家庭にあっては3人のお子さんを立派に育てられた。模範的な父親であった，と私は思う。あれほどまでの子煩悩とは知らなかった。下のお嬢さんが嫁がれてから権 泰吉の緊張感が融けてしまったのではなかったのか。

学部長，大学院経営学研究科委員長の重い仕事も立派に成し遂げられた。学長室専門員も斉藤正直学長の時代に勤められ，教職員労働組合にあっては副委員長も勤められた。

今日まで権 泰吉教授と接した一人として，多くの同僚，友人の一人として感謝の意を表し，長年の努力を重ねられてきたことに敬意を表しながら，なお人生を豊かにと祈らずにいられない。

深く感謝したい。ありがとうございました。

高橋 俊夫